

県研究主題

生徒一人ひとりの生きる力を育む指導計画及び指導の工夫・改善

提案 1

提案者 原田 朋美 (川崎地区)

<研究主題>

自ら考え、共に学び、解決し、表現する力をもった、生徒の育成
— 体験活動の工夫と思考ツールの効果的活用 —

1 提案内容

総合的な学習の時間のテーマとして、1年生「福祉学習」、2年生「キャリア学習」、3年生「自己の生き方学習」という学校としての枠組みはあったものの、各学年の裁量で取り組まれていた経緯がある。また、平成25年度の全国学力・状況調査のアンケート結果においても、総合的な学習の時間の質問項目が県・全国の平均値を大きく下回っていた。

このことから、「3年間を見通した総合的な学習の時間」のカリキュラムづくり、またそのカリキュラムを支える「体験活動の工夫と思考ツールの効果的な活用」の研究を下記のように進めた。

(1) 「総合的な学習の時間」推進委員会の発足

～「学習研究部」、「調査研究部」、「学習環境部」を立ち上げ、全教員で研究を実践～

- ① 学習研究部・・・単元の構成や見直し、体験学習の調整などの実施
- ② 調査研究部・・・思考ツールの検討やアンケート調査の実施と分析などの実施
- ③ 学習環境部・・・環境作りや研究成果の掲示などの実施

(2) 研究内容

思考判断力、表現力、将来設計力、意思決定力、行動力、社会参画力、他者理解力、人間関係形成力。これら8つの力を3年間で身に付くような学習計画を構築した。

① 3年間を見通しがある学習計画の構築

- ア 1年生・・・地域の防災と福祉
- イ 2年生・・・キャリア学習
- ウ 3年生・・・歴史学習と自己の生き方学習

② 体験活動の重視

- ア 1年生・・・福祉体験、ブラインドサッカー体験、DIG体験
- イ 2年生・・・技術校訪問、職業講話、職場体験、企業訪問
- ウ 3年生・・・修学旅行、卒業生や上級学校の先生による講演

③ 思考ツールの活用

フィッシュボーンなどの思考ツールを、総合的な学習の時間のみならず、各教科や領域などでも実施した。このことで情報整理・分析力の高まり、言語活動の充実が図られた。

(3) 研究の成果と課題

成果 ① 思考ツールが生徒だけでなく、教員にも日常的なものとなってきた。

- ② 学習計画が常に見直され、よりよいものとなっている。
- ③ 生徒の話し合い活動が積極的になり、アンケート結果からも「総合的な学習の時間」に対する意識に改善が見られている。

- 課題
- ① 思考ツールの必然性を見直し、より適切な活用を考えていく必要がある。
 - ② 体験活動において、まだ地域の人材を活かしきれていない部分もある。
 - ③ 体験活動を継続的に実施していくことが大切である。

2 協議内容 「3年間を見通した総合的な学習の時間の取り組みと思考ツールの活用」

(1) 3年間を見通した取組をしている学校の実践紹介

3年間をつなげるという観点から、地域で活用するための学習活動を学校行事（主に校外行事）とリンクさせている。

(2) 提案に対する質疑

- ① 体験学習の取り組みが大変で、縮小傾向になっている。
→アポをとることは大変ではあるが、学校との関係ができるとスムーズになってくる。
- ② 身に付けさせたい力、ゲストティーチャーと教員でどのように共有しているか。
→事前に密な打ち合わせを行い、教員側のビジョン（生徒に学んでほしいこと、事後の振り返りでやってほしいこと）を明確に伝えるよう努めている。
- ③ 「3年間を見通した取り組み」とあるが、具体的にどのようにつながっているのか。
→発表能力が学年を重ねるごとに高まっている。また、1年生から多くの領域を学んでいるために、考え方の土壌も養われている。このことから、将来設計の選択肢や学んだことに裏打ちされた豊かな表現力が育成されていると考えている。
- ④ 生徒の学習活動と思考ツールにより組み合わせはあるのか。
→失敗を重ねながら改良しているが、地域比較はベン図、イメージの拡大にはウェビングマップが有効であった。
- ⑤ 教員が一丸となって総合的な学習の取り組むための秘訣を教えてほしい。
→各担当者が集まる機会を設け、決定した内容を皆で検討するなど、多くの職員に関わってもらうことが重要である。また指定研究なども有効な手段である。

3 まとめ

今回の発表で特筆すべき点は、「身につけたい力の相関図」、「自校の課題を踏まえたテーマ設定」、「全職員で取り組むための骨格づくり」、そして「体験活動の充実」である。

体験活動の充実のためには、体験をさせるだけではなく、どのように課題を持たせ、情報を集め、分析した結果をまとめさせるかまでの一連の流れを教員側が考えなければならない。思考ツールの活用においても同様で、「生徒の学び」を念頭に置くことが大切である。

地域や学校の課題を拾い、総合的な学習の時間へ活かす。同時に、地域の人材を活かし、地域に足をつけることで、様々な学習を重ね、地域とのつながりを広げてもらいたい。

＜研究主題＞

体験活動と言語活動の充実

— 地域の特性を生かして —

1 提案内容

(1) 課題設定

秦野市では、言語活動の充実について研究する中で、探究的な学習における「まとめ・表現」において、自分の考えや意見を他者と交換し合うことに課題を抱えている生徒が多くいるとしている。そこで、生徒自身が学習に主体的に取り組み、継続、発展するための手立てとして、地域の特性を生かした題材を設定した。

(2) 研究実践内容

秦野市は自然豊かな盆地で、江戸時代よりたばこ産業によって栄えてきた。70年前に農業から工業へと転換、さらに住宅地が拡大した。そして、現在新東名高速道路の建設により、新たな転機を迎えようとしている。学区に秦野SAができ、羽根トンネルも開通する。しかし、具体的にどのようなものを建設しているのか理解している生徒は少なかった。そこで、まず秦野について再確認し、実際に工事現場で働く方々と関わることで、身近に迫る大きな変化に向き合い、そこから考えられる課題や秦野市の魅力を考え、多くの人に発信する方法を探る、という過程を計画し、取り組んだ。

(3) 具体的な実践計画・内容

- ① 私たちの生活する地域（秦野市）を知ろう
- ② 新東名高速道路・羽根トンネル見学事前指導・見学
- ③ 新東名高速道路・羽根トンネル見学まとめ&未来を考える
- ④ 秦野をPRしよう
- ⑤ 秦野をPRしよう 発表会

(4) 成果と課題

生徒の疑問を生かし、身近な地域を題材として扱うことで主体的に学ぶことができた。また、工事の担当の方から説明を直接聞いたり実際に見学したりという体験的な学びから、深い学びへとつながった。地域を知ることを通して、秦野市の魅力の再確認やこれからのまちづくりの考えを広げることもできた。発表に関しては、他の班の発想や工夫、評価シートの他の生徒の意見を踏まえて、さらによりよいものにしようとする様子が伺えた。課題としては、該当学年が1年生であり、教科横断的に取り組める内容が少なかった点である。また、コンピュータを用いて、より視覚と聴覚に効果的に訴えかける発表を目指していきたい。

2 協議内容「地域の特色を活かした総合的な学習の時間」

(1) 質疑応答

Q 課題解決のためにどのような手立てをしたのか。

A 生徒の地域への思いや言葉を踏まえ、現存のもの、新たなものについて、幅広く考えられるような多様な課題設定を意識した。

Q これまで、地域に関してどのような学習を行ってきたのか。

A 地域との結びつきを大切に、各学年のローテーション活動の中で、主に地域の福

祉施設への訪問を行っている。

(2) 協議（協議の柱「各学校の特色ある活動を通して育てたい資質・能力」）

- ・ 地域の教材を扱う際には、小学校でどのような学習がなされてきたのかを知ることが大切であり、そのためにも小中連携は重要である。
- ・ 言語活動の充実においては、自分の考えを伝え、他の生徒の発表を聞き、改めて考えを広げ、そこから生まれた疑問から新しい知識の獲得につながるということが重要である。

3 まとめ

本提案は、地域の題材を生かした充実した内容であった。生徒が各教科で身に付けた力を活用し、多角的に現状を捉え、探究的な学習を進めていくことで、多様な視点から問題を捉え、よりよく問題を解決する資質や能力を育むことができる。さらに主体的、協働的に取り組む活動を通して生き方を考えることは、キャリア教育としても意義がある。

新学習指導要領では、教科を超えた全ての基盤となる資質・能力を育成するため、探究的な学習の過程において、協働して課題を解決する活動や、言語により分析・まとめ・表現する活動を行うとしている。さらに、考えるための技法も挙げられている。また、コンピュータ、情報通信ネットワークなどの効果的な活用という視点も大切にしたい。

4 全体協議 「各校の特色ある活動を通して育てたい資質・能力」

- ・ 1・2年生から、3年生へどのようにつなげていくかが課題
- ・ 自分がどのように生きていくのか、生き方を考えさせるような取組の実践
- ・ 人権を大きなテーマとし、全教育活動の中で展開
- ・ 教科学習の中で、横断的に総合に必要なスキルを習得
- ・ 卒業後のあるべき姿をイメージした活動計画の重要性
- ・ 生徒の実態を分析し、身に付けてほしい力を考えることが基本
- ・ 特色を無理に探すのではなく、身に付けてほしい力を全教育課程で実施
- ・ 豊かな学習環境を生かすため、アンケートなどから明確な根拠を見付け、学校課題を設定し、展開するとよい。
- ・ 各学年において、身に付けてほしい力を望んでいるかを熟考し、課題発見に発展
- ・ 課題の設定、課題解決に向けた教師側の仕掛け、教科の専門性を活かした授業、地域・小学校との連携、ゲストティーチャーとの連携

5 全体のまとめ

身に付けたい力、資質・能力を育成するにあたっては、まず実態を見取り、何を題材として、どのように資質・能力を身に付けさせていくのかという設定が重要である。小中連携を意識し、実態把握に小学校での見取りを組み込むことでより効果的な課題設定ができ、深い学びにつながっていくと考えられる。

知識と知識が結び付いたり、場面と場面が結び付いたりして知識が広がり、学習の深まりが得られるよう、つながりが一目で見える年間指導計画の作成が必要である。

評価については、結果ではなく探究課題を解決する過程や個人の成長を重視する。